



掌中乙由叢句集

全



掌中叢林舎乙由發句集

春之部

二月の〜蒔繪や法〜門乃松
 水や井戸〜をの〜囃ひ神
 孤燈〜市法〜又面白き喜ふ多ふ
 経藥もゆれえき〜さ〜川日新
 晝老孤芥と元旦のめつ〜ふ経ひて
 春の孤燈〜そ〜や根白州

至飛出扉の隅を志所くひ遊もあまも
わくまをほめ去を待ゆこり

何く遊り苦力さく一先をかたり縄
揺らめく物さうりもちり一さし川層
新ぬや老成まふれく清井筒

こゝ一ひ芽程の花と先達せんと大和すある

十方庵の古き一の音信不告あーりれハ

何もう色より野くせ初こよりみ

笠縫も綿さく出給や新葉掃
組板乃較びふく事く世新う船
約下訪る聖個数人新葉つと

人日此一葉にけ世をまり一人さくさく

留於世や新す一何くく証乃喜

見ゆらふ名ふ事か一赤一梅花花

児童結念せ病をれを梅下の助と養ふ

寺の梅おゆ一盛たうれこ

見よのまや実を待寺乃正免花
天神奉納

林の盛茂笠下や梅の白ひる
雲の若とお海しと歌を以て
うらひまは啼く日暮休も静まりぬ
雲さうぬ身成を海める柳うき
多うれく柳と松ふ所るうか
層陰ふも彼多ふ志う歌く柳哉

初態美乃沈うり士峯幽ふ月心
孤免出に富士や弥地の色と
集を琵琶をくもやおほる月
清うくや何をわかれし中う
東花坊う新巻乃屏風小蓮六わりて
白程と通しと落出し
乙多う来くく机乃墨中お
うらひまよ返奏の通交蛙う

天祥書納

牙々へ涼日も暮ふしと自在竹
半の角落ぬまのい色 祢まん像
涅槃まや浴室ハまな 裸むし
老僧ふ死さうい何りねけん像
風人を送明
晴小齋きぬりこめふか院陀佛
草臥て早ふかひ影や夕や暮

二月末の又日を菜種の新幸しうや

新垣や菜まきけを又 鎌の舞
あまをまの山あも何うそく山採
ふんをの代笑ひ出しけり山さう

蕙翁の像

芳好をんこひまうしやまー花の香

蓮二と送歌

足印くくや花の香氣を何うかき

今更良工任書所後秋小亦以

善法以伴速了之云亦八年様

最とる法屯にまありの事亦の是

加賀村の代女不對し

園の名能等より芳しそれ乃雪

曲あり即雪りいそあり等釣籠

三日存も強く小更難也桃乃酒

雪中より人乃勢あり桃能花

け菜を餅り搗れく花咲ぬ

出代乃運也釣籠其種心まて

おろり能種も有りまや法もるん

後秋を送信

持歩り菓や風呂煮より旅す免

漁棠冬春以静あり候小勢り

山より流れたりありけ

養ぬ人致捨く度也最乃花

龜山八幡宮車納

松戸後そ如緒ひ免もお世末也浦
船へ赴く人と送歌

道くも大津終ふ色あぬの景
仙人乃基も指さぬわらひう花
素心も海より満り平八作波不傳流
まけ笠也脱と着ると如前走車
終麻と城とく

川春や櫻もくく紀終麻分り

強生海日田村川とる

光陰乃矢も川春や田也川
常能啼屋くく孝り内日星

夏之節

川雨かきく出ま終給う那

ちま良少く

骨て何流園扇も多し更衣

ほろろ交は掛摩乃身の筋と時

山家西々

時為卯年 終ま歌 音もあ
りく交す 一歌く 結月乃欠
夕暮を 坤ふられ 何と けしうまに
渚佛や 乳を多し 結も 比丘尼寺
色く 結朝乃 帯や 花 浄堂
鏡お 詠に 人の あろろや 牡丹畑

古山亭に中より 夢終ふ 卯年の 春

いまこ 夢とられま

わささうふ 牡丹の 影乃 旅 森うふ
濱阿あし 秋の間 結も 色や か 記つとも
伸ふ 結も 隠れ 結 海や 杜 翁
芍薬乃 一味 咲 多り 醫者 の 庭
う 交 夢 也 と 結 也 阿 あ し 結 終 小 咲
やうて 刺 兎も 結 小 や 芥子 の 花

乙
時
萬事菴のわし 露の露にたつとあての
日筆をひらきとあ 一富士二鷹とひと
はるをそぞろにふまけりてあまのこ
ちうれ又竹をまじりぬの君子よあまのこ
今更りふへあまのこをひらきあまのこ
子業の始とて七十の壽子なり
一舟と送歌

作の子孫を子なりその子なき子まで

石山能るもやまけに花ふあまのこ

画賛

藤うられの籠 雲り 螢と那
のんあまのこ われも淋しぬ 籠と
影落る 篋なり 枝や青なり

東武へ赴く人と送歌

雲の夢はあまのこ 一石二さし 君子
沈はあまのこ 軌くやあまのこ

毎乃名を酒あもあつて糖うま
蝶の羽も渡り通ふやぬをさけ

春波うね国へ赴くと送信

姫申りも鬼をあはれしや茶はう

加賀の子代女は海にわたり逢ふ

九重天一重く歩けし申りうま

多野女人をさく

百命もさ姫申りふ名ふとほろり歌

同~~~~木倉堂にて

程のりれ衆も蜜柑をされ若時

紫陽花よあつて交り日夕日うあ

山うけや踏子とのけは田うへ唄

間くは顔見合をさく田極うま

和昆福地能神めと

八乙女夢田うし観ふたり夏神樂

片のまさくよまや大海と一誇れ

追悼

蕪草も屯くも向新夏野分
夕歌能氣下多歌りハあうりも
南天の屯や去年能實乃隣
中戸も此路を人あり壬午の猿
こしう我や人若何手は夫和糖
遠坂の屯うそて象と見傳りて
今や屯く軍乃清あふ象の氣

蛭子もおよく手あまたぬりぬ

蒨秋のうは事なりーを方あふ
こあうく象へ別歌の時

めうり象よ日遊ちうすを 風車
操子とらんくや乳の強布しり
揃りる暑以都りありむむ後山

ぬえり

花よりも一ぬきこの後 蓮乃音

蓮池や 寺まきこゝ土乃何ぞ
 への瓜や 越へ出れえ 今も昔も
 冬の月 能く時ふも 一ゆい
 見ふも 秋の秋の 更ありけ
 月能く 池の池の 廣沢の月
 細涼を 竹の竹の 秋の子
 かへーと 春の春の 池の池
 池の池 春の春の 池の池

葉と草 能く池の池の 池の池
 名も草へく 瓜の瓜の 池の池
 玉の玉 能く池の池の 池の池
 新の新 能く池の池の 池の池
 涼ー何と 百里村ー 池の池
 すーとや 夢もぬ 池の池
 夕まゝ 能く池の池の 池の池
 春も笑ひ 秋もよ 池の池

幻と庵あり花結何〜舟のゆり
いふくも何〜花の香に折ハ巨魁の
友結あつらうまうり以柔漢の〜ゆも
お〜か〜んや予は夏と夏ふあつて数
の采と花然と送海眼小帰結又花
直録のまじと結さ 惺きの筆ふ美系
とま〜の筆あつらうり

像〜とやこれ墨を以山もあ〜

き結嘗きこの山と交りまきり
不壇紙下きこりよの何つさうを
ふぬや智恵とぬ〜のりありあ

秋之部

凌宵乃花吹消〜今朝の秋
秋寺川や袋もあ結 彌子亦
立琴に風も雪井乃あ〜る
ふふま〜ふか〜て裸や亦婦人

こと琴や秋海棠乃瓜はつを
 机を死を—先や星のふれを
 星合也橋と品—のめか〜
 秋もま〜猿飛り〜秋阿つと外
 定り能純きもうあ—ぬはあ
 小車乃乃くやあ〜もままつり
 妻能身油りをはあ〜
 おものけと舞ふふわけて〜あ〜

まつ宵小突我梢やあすあ〜ぬ
 名月や橋を落〜も舟乃〜
 やと法然山を流〜はや〜の月
 名月や流〜能親も橋ま〜
 名月やし川その山能 聴勢とも
 痛〜赤紙公服むやう〜の能月
 名月や齒舟もゆ〜能舟もり
 いとよひやりあ能留の園を〜

十六夜や菊出能逢以人なりと海
山葎や蕪会まうくはあきく放生會
松茸能為年あつるは豆腐うま

亡父の忌日よ

まはひーの傷ふはあても 秋多き
麻の智あつり角をあらまらり
秋風やあつらぬくく麻乃あえ
糸の若れ居るぬ山をまき書し

野上の里あき

萩とえく居れも薄うまのれあり
近付り能きあてて秋 踊り哉
八約や踊る方足とかしこまり

八月二日武務中身満うり一人と悼
惜されくあはれを入ま二日内
初丁や一帯り居る文字う案
飯屋をくく仕とよてを丁のあ

以道へ迷ふもよも乃花

画賛

蘭の香を惹きあむるきりくも

山田屋何ううらみあそ

蕨花をふまよめや既陀の墨所

夕顔や秋も扇よのせうきん

ゆふのやも枕仕世に醒わけり船

待宵や立花ふらふは露の松

毎朝あり地蔵をぬれてかど

刈仕おふ田にうらりと紫山子うま

画賛

横平ふかききくや露乃は

おいらくもきも書りあき

雪をまきこもくあり梅めとん

波をのこも洗ひぬきぬき

八重菊もりふ九日乃あはひの如

秋の佳よ抄ひく

秋の佳よ花又葉多し一寺の菊

世に多し秋の佳よ花又葉多し

十三歌

盗人の多し秋の佳よ花又葉多し

夏蟬乃多し秋の佳よ花又葉多し

一とせ抄の佳よ花又葉多し

万葉一とせ抄の佳よ花又葉多し

多しとせ抄の佳よ花又葉多し

其の其席の奥とあり

蛤乃跡平の佳よ花又葉多し

流る来て子も飯喰ふや稻子中

林間より仁王も破りて

未葉亭抄

松喜し猶よむ之をりみち

月秋結及く西月は

老母の喪不覚死し人々の目へ
明不教法木の影不あれも秋の暮

兔乃画賛

何狐咬何をくく居秋のくれ
九逢母冬屍もくはくは秋の暮ぬ

冬之節

赤以実の何く 弥添初くくれ
雪染結ぬれ色覚せくく川 時返

苔果焼くくち冬冬冬冬冬

乙高亭の招れく

金屏り乾くくくれ孤今りく
蓮广忌也拂子不此の秋暈もか
枯芦不留也砂くく池乃鴨
鶏形冬之生乃十秋り那
蓮池も招も好も秋く十秋り
風也苔も山秋さぬ 雪も結 松

蕉菴の塚あり

去あな 跡残あふや 春仙屯
木鬼孤目まゝ 幾あけ死落葉
麦まきさや 一畝冬又むらみ風

素道の氣宅を賀し

身不毛尾籠乃はくや 忍ひす襟
足言平 櫛と跡うて 枯野
けりめく 麦林の宋居と 踏ひとる

世に人を 家妻小見か 一と 終もあう

隠れ家や 餘取う 見え冬牡丹
冬籠り 櫛一掃 枕
枕りも ぬ豆腐や 冬籠り

秋交り入産の時

世の中のかゝり 泥け 水
吹りや 子音も 川流曲り 形
管糸孤隣も あく ちとる

星の夜に梨地と啼やせし子音
を川をよきと持てぬ敷らうし
風孤子に砂子果報や休乃雪

大漢うき

雪とんよき帆城とつれりう韻う嶽
鷄乃りまされてをあつてまうか

小野結湊のゆに於ひ

吹まてくを巨魁へり休ゆにうな

月影と乾くを〜みを清くし

冬の月白〜豆腐と梅乃花

雪と尾乃〜〜〜

うとんを人牙喰を〜

管と葉茶不淋〜秋ハ雪也の

蔓小巻〜

めハ雪不降を歩りや碎多き
木のけ〜をう不あまへえ生海龍

猫八や梅も眼乃をくきとき
猫八や八咫の薪も山狭出於
煙火やわづらふれを早ひし
あきし方よりやしのまを

しのみよと大黒取巾とやむ
あきし名張多波とのどけ

世の音を笑ぬもうきし一丸取巾
紙子あきしんて飛るや竹取の衣碓

ゆれそ知命とやりのまあき

象数も百乃行着やあきし一丸取巾
まきし馬もあきし藪の中
うらむすも一丸取巾あきし
酒もあきし餅も搗以多丸取巾

言所してまを結の

隠れ象や卸り梅戸を忘れ
あきしあきしあきしあきしあきし

香城まの味懐かきこめり年形市
餘雨くみ紙綴り煉と掃せりり
葱一把割ふくま〜と忘れま
中〜の内りふのえきや梅乃香

江戸本石町十軒店 萬笈堂英平吉藏

其角發句集 二冊 嵐雪句集 二冊

蓼太句集 六冊

俳諧文集 二冊 蟹守大人輯 尚時言名の俳人の文珍輯

發句古今撰 同輯 附葛里連句集 三冊

俳諧新五百題 護物大人輯 二冊

新五百題 後編

同輯

二冊

發句類聚

蓼松大人重校

二冊

發句類題

雪中菴火人輯

二冊

發句五百題

白雄房撰

二冊

俳諧恋の志とてらま

律雪庵北元大人輯

二冊

この志も是迄季考のよき恋の初なるふよりして
恋の詞をとり集む

俳諧手焼灯

季考の書と

二冊

袖のくさ

季考懐中小本

一冊

俳諧四季名奇

懐中本落葉抄
季考大成より

一冊

俳諧季考の便覧

懐中一牧搦

萬葉用字格

春生上人撰
万葉集ののりをもと

一冊

定家卿の歌巻

一冊

今古の形を

高井八穂大人撰折本

一冊

尚古の形を

山本明徳大人撰折本

一冊

対照の形を

若波の大人撰折本

一冊

音便撮要

喜望上人撰懐中本

一冊

子島の跡

中臣親満大人撰

一冊

此の古と名紙矩尺の書とをばも懸然
ちらひに古人の書と筆よりうらうらひ

